

11. T<sub>3</sub> リアキットの使用経験

田辺恵三子 ○春名 桃江

(天理よろず相談所病院・臨床病理部)

稲田 満夫

(同・内分泌内科)

ダイナボット RI 研究所で作製された T<sub>3</sub> の Radioimmunoassay 用 Kit を使用する機会を得たので、その使用経験について報告する。

本法は T<sub>3</sub> と TBG との結合阻害剤として、ANS を用い、又 B と F の分離には Dextran coated charcoal を用いる一抗体法であった。

標準曲線の F/T(%) は T<sub>3</sub>O 濃度ではほぼ30%、T<sub>3</sub>800ng/100ml、ではほぼ70%で、400ng/100ml まで感度のよい標準曲線が得られた。バセドウ病患者血清を倍数希釈してその F/T(%) を標準曲線のそれと比較すると両者はほぼ平行して変動し、本法での測定値は内因性の T<sub>3</sub> 濃度をよく反映すると考えられた。次に T<sub>3</sub>free 血清に T<sub>3</sub> を加え、回収率試験を行ったが、平均回収率は 84±9% でほぼ良好であった。本法による測定値の再現性をみると、まづ二重測定値間に有意差はなかった。次に日差変動をみると、M±SD=60±9, 113±19, および 700±17 で CV は各々 15.0%, 16.8%, 2.4% で変動はやや大きいと考えられた。

健康男女14人の平均 T<sub>3</sub> 濃度は 119±12ng/100ml、であった。一方内分泌疾患を除外した入院患者23例のそれは 88±23ng/100ml、であった。未治療甲状腺機能亢進症患者 24 例の血清中 T<sub>3</sub> 濃度は 479±174ng/100ml、又未治療甲状腺機能低下症患者14例のそれは 36±22ng/100ml、で、よく甲状腺機能を反映した。

T<sub>3</sub> 濃度は T<sub>4</sub> 濃度とはほぼ平行して変動したが、両者に解離のみられる場合があり、とくに T<sub>3</sub> Thyrotoxicosis の診断に T<sub>3</sub> 測定は不可欠である。

12. <sup>99m</sup>Tc 標識 Bleomycin による甲状腺腫瘍の診断

○森 徹 小鳥 輝男 坂本 力

鳥塚 莞爾

(京大・放射線科)

浜本 研 藤田 透 高坂 唯子

(同・放射線部)

各種甲状腺疾患患者 131 例について <sup>99m</sup>Tc 標識 Bleomycin 静注後のシンチグラフィーを行ってその腫瘍診断上の有用性を検討した。

検査方法は既報の如く、自家製 <sup>99m</sup>Tc-Bleomycin (BLM\*) 3~5 mCi 静注後 30~60 分の間に 4,000 ホールコリメーター装置ガンマカメラを用いてシンチフォトを作製した。

針生検又は手術で確認した甲状腺癌53例中乳頭状腺癌は88%(29/33)、濾胞状腺癌は94%(16/17) 髓様癌 1 例及び未分化癌 2 例は共に陽性で合わせて48例(91%)に BLM\* の病巣部への集積を認めた。癌治療例では臨床的に残存の明らかなもの 7 例中 7 例、疑わしいもの 7 例中 5 例に陽性で、治癒状態のものは10例中 2 例のみに集積を認めた。良性疾患における成績は結節性甲状腺腫30例中 6 例20%に、慢性甲状腺炎は17例中 4 例24%に陽性であったが、バセドウ病の 2 例、単純性甲状腺腫 4 例は陰性であった。なおヨード有機化障碍の 1 例に BLM\* のびまん性かつ高度の集積がみられた。

<sup>67</sup>Ga-citrate は甲状腺癌25例中 6 例 (24%) にのみ陽性で分化癌の成績が悪く、また慢性甲状腺炎は 8 例中 5 例に集積を示した。針生検と BLM\* の比較では甲状腺癌中針生検の診断率は57%に留まったが、針生検で悪性所見を示した 2 例及び良性と判断された 2 例にのみ BLM\* は陰性であった。一方手術により確認された 9 例の良性結節例中 BLM\* は 1 例であった。

以上の成績から BLM\* によるシンチグラフィーは甲状腺癌診断上極めて有用と判断された。